様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 7 日現在

機関番号：34316
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2011
課題番号：21530139
研究課題名（和文）京都学派の歴史と教訓：西田幾多郎と後継者の構成主義政治理論についての分析
研究課題名（英文） History and Lessens of the Kyoto School: An analysis of Constructivist Theories of Nishida Kitaro and his disciples
研究代表者
清水　耕介（SHIMIZU KOSUKE）
龍谷大学・国際文化学部・教授
研究者番号：70310703

研究成果の概要（和文）：西田幾多郎による「無の場所」や「絶対矛盾的自己同一」といった概念と西田の第二次大戦における戦争協力との問題を詳細に分析。その結果、彼の「文化」概念が国民国家概念によって大きく影響を受けていたことを明らかにした。また、彼の後継者達も同様の傾向があることを発表論文等で指摘した。
　また西洋哲学に対抗する形で出て来た京都学派哲学の背景と現代の国際関係における非西欧型国際関係理論が登場した背景とがよく似ていることを指摘。20 世紀初頭の世界と 21 世紀初頭の世界との類似性についての研究を進め、学会発表などを行った。

研究成果の概要（英文）：The relationship of such concepts of Nishida Kitaro as ‘Place of Nothingness’ and ‘Absolute Contradictory Identity’ and his involvement in the wartime regime was thoroughly Analysed. This research revealed that his concept of ‘Culture’ was profoundly influenced by ‘nation-state’. I also pointed out in the articles published that his disciples showed same inclination.
　It was also pointed out that there are striking similarities between the beginning of the 20th century when the Kyoto School’s philosophy was rapidly developed against the Western philosophy and the 21st century when non-Western international relations theories are attracting wide audience of international relations specialists. In doing so, I presented this argument at several international academic conferences.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：政治学
科研費の分科・細目：政治思想
キーワード：国際関係理論、政治思想、京都学派、構築主義、非西欧型国際関係理論、戸坂潤、西田幾多郎、三木清

１．研究開始当初の背景

　代表者は国際関係理論の研究を行って来たが、そのほとんどは本質主義的な議論であり、構成主義的な議論はほとんどなかった。この点について 2007 年頃から構成主義の議論が出始め、注目を集めだした。そこで、本

研究では、この構成主義に焦点を当て、日本における構成主義政治思想の展開を分析することとした。

２．研究の目的

日本における構成主義については先行研究があったものの、十分に展開はされておらず、さらなる展開が待たれていた。特に、京都学派などの構成主義理論は国内ではそれなりのプレゼンスを持っていたが、海外においては宗教哲学としてのみ理解され、政治哲学としてはほとんど知られていなかった。そこで、本研究は京都学派の政治理論をとりあげ、構成主義という点から分析するとともに、海外に向けて英語で発表することを目的とした。

本研究において具体的に明らかにしたいことは、以下の４点であった。

（１）京都学派の中での理論的な比較（西田およびその後継者達）および現代の欧米の構成主義との比較を行い、その類似点・相違点をはっきりさせること。これが 1 年目の到達目標であった。

（２）2 年目の到達目標は、京都学派の戦争協力の経験を踏まえ、構成主義と政治権力の関係についての歴史を顕在化させることである。これまで欧米の国際関係学会では構成主義が次世代の理論として無批判に賞賛されてきた。しかし、京都学派の経験は構成主義でさえ近代に知と権力の関係と無関係ではないことを意味している。そしてこの歴史を詳しく分析しそれを世界的に公表していくことは、今後の国際的な構成主義の流れに問題提起をすることとなるであろう。そこでは、京都学派の戦争協力、特に「世界史の理論」や「近代の超克」の中での京都学派の理論を詳しく検証したい。西田による真実－特殊、真理－普遍という理論的構図が、どのように京都学派の中で受け継がれ、また受け継がれなかったのかがひとつの焦点であり、代表者は現段階でこの理論的断絶が京都学派の戦争協力のひとつの原因であると現段階では考えている。2 年目ではこの点についての詳しい検証を行うこととした。

（３）京都学派の哲学を国際関係理論と結びつけることは、必然的に仏教と国際関係との関係を分析する必要性を生み出す。特に西田の理論にみられる新しい仏教のエッセンスを取り入れた構成主義による世界観は政治学的な先行研究がほとんどないこともあり非常に難しいものであるが、この研究が進めば紛争解決理論にも寄与するであろう。これを三年目に追求したい点とした。

（４）本研究の目的はこれまでほとんど議論されることのなかった京都学派の構成主義的国際関係理論の歴史的展開を明らかにすることであったが、この研究は欧米ではほとんど進展しておらず、国内でもシステマティックな研究は見当たらない。海外に向けた文献としては猪口論文 (Inoguchi, 2007, IRAP) があるが、これは簡単に日本の国際関係の発展をまとめ海外に紹介したものであり、具体的な議論が展開されているわけではない。その意味で、本研究の特徴はこの猪口の議論をさらに展開し、海外に向けて京都学派の構成主義理論の発展と経験を具体的な形で提示していくことにあった。

さらに派生的に目的として予測されたのは、京都学派と現代の欧米の構成主義との比較研究を行うことによって、構成主義のもつ危険性を顕在化させることであった。つまり、西田理論のように特殊と普遍とを矛盾の中に理解した（仏教的）構成主義とその後継者たちによる特殊を強調するタイプの現実主義的構成主義との違いは、その後の戦争協力という文脈で非常に重要であり、現実主義的な構成主義の危険性を表していると思われる。そして、現代の欧米で展開されている構成主義が後者のタイプであるとするなら、そこにもまた構成主義の危うさが孕まれていることを意味する。その意味で、京都学派の経験は現代国際関係理論の展開にとって非常に重要であると考えられる。

さらに本研究の進展に伴い、仏教的な伝統を国際関係理論の発展に反映させることによる新たな国際関係理論の展開が期待された。この試みは先にあげた猪口論文ではほとんどふれられておらず、これまで国内においてもほとんど行われていない。その意味で、本研究の価値は大きいと思われる。一般に西洋の「学」と東洋の「教」という対比がしばしば行われるが、この「教」の伝統を「学」の中に反映させることは非常に難しい。経済学においてはシューマッハの「Buddhist Economics」(『スモール・イズ・ビューティフル』）講談社　1986）があるが、政治学や国際関係に直接的に仏教思想を反映させたものは皆無である。しかしながら、京都学派、特に西田哲学、はこの挑戦を続けた学術的流れであり（Goto-Jones は特にこの点を強調している Christopher Goto-Jones *Political Philosophy in Japan: Nishida, the Kyoto School, and Co-prosperity*, Routledge, 2005)、それは現在代表者が奉職している龍谷大学に引き継がれた形で展開している。その意味で、本研究においては、仏教と国際関係学とのユニゾンも期待されたのである。

３．研究の方法

主として資料蒐集とその分析、および海外へ向けての発表が中心であった。研究期間の前半は資料蒐集とその分析に費やし、後半は主として発表を行うことによって同じよう

な研究を行っている海外の研究者と意見交換を行った。また研究発表はできるだけ国際学会において英語で行うように心がけた。

４．研究成果

本研究の主たる目的は京都学派の構築主義理論をベースに新たな国際関係理論の可能性を探ることにあったが、本研究を通して明らかになってきたことは、京都学派の構成主義理論は一方で現代の国際関係理論に対する大きな貢献となりうるが、他方で多様な文化概念を国家主義ベースで画一化してしまう可能性があるということである。すなわち、構成主義自体は現代の実証主義一辺倒の国際関係理論に対するアンチテーゼとして貢献することは可能であるが、構成主義が文化および国家という枠組みを所与のものとして受け入れた形で展開する時、いわゆるオクシデンタリズムの罠にとらわれる可能性が高くなるのである。これは当時の非西欧の国際関係理論の展開に特徴的なものであり、京都学派に限られた話ではない。そのメカニズムを明らかにするためには、大戦間期の京都学派以外の国内の政治思想や国外における非西欧の政治思想について研究を進める必要があり、事実こうした側面はすでにE.H.カーやハンナ・アレントによっても触れられている。彼らは主としてドイツに焦点を当てた研究を行ったが、日本についての同様の研究は少なくとも英文ではほとんど発表されていない。そのため、その部分での更なる研究および海外に向けた発信が必要とされるであろう。これは特に、現代におけるいわゆる Post-Western IRT の流れを考えれば、早急に進める必要があると考えられる。

具体的な目標として掲げた４点については、以下の通りである。

（１）欧米の構成主義との比較：この点に関しては、京都学派哲学がヘーゲルの弁証法やウィリアム・ジェームスによる純粋経験概念の影響を受けていることが明らかとなったことから、比較的西欧の構成主義とも共通点が多いことが明らかとなった。

（２）構成主義と政治権力との関係：京都学派の戦争協力はよく知られているが、詳細に検証していくと、戦争協力という形で簡単に割り切ることができないことも明らかとなった。すなわち、彼らの戦争協力は表面的にはそう見えるが、実態としては戦争にまつわる言葉の再解釈を通して、戦争の意味を変えようとしていたことは明らかであり、必ずしも単純な戦争協力とは言いがたいことが明らかとなった。

（３）仏教との関連：この点に関しては、研究という意味では大きな成果は得られていない。それというのも、京都学派は海外においてすでに仏教哲学として広く知られており、その研究の中で蓄積された知見以上のものを発見することはできなかった。

（４）海外に向けての研究発表：代表者は、この点については特に力を入れて行った。当初の計画では、年 1～2 回の海外発表の予定であったが、実際には計９回、年平均３回の割合で発表を行った。ここにあげたもの以外にも、こうした海外発表の経験から、討論者として招待を受けることもあり、それを合計すれば、年 4～5 回の割合で国際学会において発表／討論を行ったこととなる。また、学術雑誌においても、オックスフォード大学出版の SSCI ジャーナルである、*International Relations of Asia Pacific* に学術論文を発表した。この論文については、その後も同様の研究において引用されるなど、国際的なインパクトがあったと自負している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 清水耕介、“現代におけるグローバルな善・悪の概念について；カント・アレント・デリダの正義”、平和研究、36、2011、43-61、査読無

② Kosuke Shimizu, “Nishida Kitaro and Japan’s Interwar Foreign Policy: War Involvement and Culturalist Political Discourse”, International Relations of Asia Pacific, 11(1),2011,157-183、査読有

③ Kosuke Shimizu, “Why were Japanese 'Postmodernists' Involved in the Wartime Regime?: Learning from Kyoto School's Theory of World History", Nobulo Nagasaki et.al., Proceedings of the Fifth Afrasian International Symposium, Conflict Resolution in the Afrasian Context: Examining More Inclusive Approaches, 2010, 19-28、査読無

④ 清水耕介、「非暴力抵抗の３つの歴史と３つの概念」、国際社会文化研究所紀要第 11 号、龍谷大学、2009、107-118、査読無

〔学会発表〕（計９件）

① Kosuke Shimizu, “Materialising ‘Non-Western’: Two Philosophers of the Kyoto School on Culture and Politics”, Nordic Association of Contemporary Japanese Society, Gothenburg University, 2012/3/22

② Kosuke Shimizu, “Materialising ‘Non-Western’: Two Philosophers of the Kyoto School on Culture and

Politics”, International Workshop, “Theorising Asia: The Development of Post-Western IR Theory, O.P.Jindal Global University,2012/2/24

③ Kosuke Shimizu, “Materialising ‘Non-Western’: Two Stories of Philosophers of the Kyoto School on Culture and Politics”, Japanese Studies Association, Tokai International College, Honolulu, 2012/1/5

④ Kosuke Shimizu, “Materialising ‘Non-Western’: Two Stories of Philosophers of the Kyoto School on Culture and Politics”, Academia Sinica International Symposium, “Democracy, Empire, and Geo-Politics”, Academia Sinica, Taiwan, 2011/12/11

⑤ Kosuke Shimizu, “Nation, Culture, State: Japan’s Softpower Diplomacy and Miyazaki Hayao’s Animation Films, MEARC Lecture series, Leiden University Netherland, 2011/2/23

⑥ Kosuke Shimizu, “Why Were Japanese ‘Postmodernists’ Involved in the Wartime Regime?: Learning from Kyoto School’s Theory of World History”, Afrasian Centre 5th international Symposium, Ryukoku University, 2010/2/6

⑦ Kosuke Shimizu, “Kyoto School and War Involvement”, International Convention for Asian Scholars, Daejun International Conference Centre, 2009/9/6,

⑧ 清水耕介、“アメリカ政治経済の特性と文化論の隆盛”、国際関係思想ネットワーク第 7 回シンポジウム、国際基督教大学、2009/4/25

⑨ 清水耕介、“国際政治経済学と文化”、社会科学研究所オープンレクチャー、2009/4/24、国際基督教大学

〔図書〕（計 4 件）

① 清水耕介（共著）伊藤誠・本山美彦編、『世界と日本の政治経済の混迷：変革への提言』、御茶の水書房、2011、283

② 清水耕介（共著）小田川大典他編、『国際政治哲学』、ナカニシヤ出版、2011、344

③ 清水耕介（共著）土佐弘之編、『グローバル政治理論』、人文書院、2011、228

④ 長崎暢子、清水耕介、『暴力／非暴力』、ミネルヴァ書房（共編著）、2010、404

６．研究組織

(1)研究代表者

清水　耕介（SHIMIZU KOSUKE）

龍谷大学・国際文化学部・教授

研究者番号：70310703

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：